

https://farid.ps/articles/the_moral_depravity_of_weaponizing_hunger/ja.html

飢餓を武器化する道徳的墮落

飢餓を意図的に武器として使用すること—民間人を制御し、強制し、またはその意志を破壊するために—は、人間の倫理と国際法に対する最も重大な違反の一つです。ガザでは、この犯罪はシステムとして洗練されてきました。起こったことは単なる人道的失敗ではなく、援助の名目で届けられる計算された支配のプログラムです。この戦略の中心には、元犯罪者から協力者となったヤセル・アブ・シャバブという人物と、食糧へのアクセスを致命的に制御する軍事化された分配体制の導入があります。虚偽の告発、代理戦争、そして食糧アクセスの致命的な管理を通じて、イスラエルは人道支援を苦しみと服従の劇場に変えました。パレスチナ人は援助物資の車列に誘い出され、撃たれる—野生動物の扱いでさえ非人道的とされる戦術です。

ヤセル・アブ・シャバブ：裏社会から代理執行者へ

ヤセル・アブ・シャバブの物語は、贖罪の物語ではなく、占領によって操られた機会主義の物語です。かつてガザの犯罪地下社会で知られた人物だったアブ・シャバブは、2023年10月の脱獄まで麻薬密売と武器密輸で投獄されていました。その後の混乱の中で、彼は自らを「人民勢力」—または「対テロサービス」とも呼ばれる一の指導者に任命しました。パレスチナ人の团结を分断し、ハマスを間接統治で弱体化させようとしたイスラエルは、報道によればアブ・シャバブのグループを武装させ、IDFが支配する地域で活動する力を与えました。

この関係は新しいものではありません。植民地勢力は長い間、道徳的に妥協した地元民を外国支配の執行者として利用してきました。しかし、ガザではこの戦術は即座に強い反発を招きました。アブ・シャバブの協力は、彼の部族や家族が彼を否定するほどの深い裏切りと見なされました。血縁と連帯が神聖な社会において、この公の拒絶は彼を追放者にしました。彼は単に排除されただけでなく、占領が腐敗させようとするすべてのもの—忠誠、アイデンティティ、抵抗—の象徴となりました。彼の物語は、占領者が個人の野心を共同体の破壊に変える方法を示しています。

虚偽の旗と援助の崩壊

イスラエルがガザの援助システムを厳しく管理する正当化の中心には、ハマスが人道物資を略奪しているという非難がありました。2024年後半に浮上したこれらの主張は、UNRWAを非合法化し、重要な供給ラインを切断するために使用されました。しかし、信頼できる報告によると、最も重大な援助窃盗事件—UNRWAの109台のトラックの略奪—はハマスではなく、アブ・シャバブの勢力によって行われたことが後に明らかになりました。それでも、この物語は持続し、既存の援助インフラを解体し、2025年5月にイスラエルと米国の支援を受けて設立された軍事化された装置であるガザ人道財団（GHF）に置き換えるために武器化されました。

ヤヒヤ・シンワルの検死：イスラエルの物語にさらに矛盾

イスラエルの主張にさらに矛盾するのは、ハマスの著名な指導者ヤヒヤ・シンワルの死時の状態です。イスラエルの検死官は、シンワルが死の3日前から食事を摂っていなかったと判断しました—これは重大な疑問を投げかけます。イスラエルが主張するようにハマスが援助を組織的に盗んでいたなら、彼らの指導者が飢えたまま放置されることは考えにくいです。この証拠は、援助分配のより広範な失敗を示唆し、物資がハマスによって蓄積されるのではなく、アブ・シャバブの民兵のような他のグループによって傍受されていることを示唆します。シンワルのような重要人物の飢餓は、厳しい現実を浮き彫りにします：援助は、誰が管理していても、意図された人々に届いていません。

ガザ人道財団：ハンガーゲームが現実に

GHFは調整と安全を約束しました。しかし、提供したのは大虐殺でした。分配ポイントは死のゾーンとなりました。催涙ガス、ゴム弾、実弾、そして群衆の暴動は、食糧の探索を毎日の口シアンルーレットに変えました。約800人のパレスチナ人が援助にアクセスしようとして殺され、さらに数千人が負傷しました。偽の前提に基づいて構築され、暴力によって維持されるこのシステムは、飢餓に対処することに失敗しただけでなく、それを制度化しました。それは救援ではなく、制御の論理を反映しています：食べるためには従わなければならず、生き残るためにには服従しなければなりません。

国際法の下では、これは戦争犯罪です。ジュネーブ条約の追加議定書Iの第54条は、戦争の手段として民間人の飢餓を明確に禁止し、「民間人の生存に不可欠な物体」の標的化や破壊を含みます。国際刑事裁判所のローマ規程も同様に、飢餓を武器として使用することを犯罪としています。信頼できる機関を解体し、援助を拒否し、分配地点で民間人を殺害することで、イスラエルは人道的とは全く言えない体制を構築しました—それは武器です。

餌で人間を狩る：人類の究極の最下点

このシステムの最も恐ろしい側面は、基本的な倫理的階層を逆転させる方法です。イスラエルを含む多くの国では、野生動物を餌で狩ることは違法です。この行為は非倫理的とされ、動物でさえ不当な苦しみから守る公正な追跡の原則に違反します。しかし、ガザでは、飢えた民間人が援助の名目で食糧に誘い出され、兵士に撃たれます。鹿に対して禁止されていることが、子供に対して合法化されています。

この倫理的逆転は偶然ではありません。それは非人間化の論理的終着点です。人々が完全に人間として見られなくなると、彼らの苦しみは背景雑音となり、彼らの死は行政的になります。道徳の深淵は、戦争の霧の中でではなく、生存そのものを占領者が配給する特権として扱う政策の明確さの中で最も広く開きます。ガザの飢えた人々は副次的な被害ではありません。彼らは標的です—誘い出され、撃たれ、動物の命に法的価値が置かれるよりも飢えさせられる人々として捨てられるシステムによって。

結論：言葉を超えた犯罪

ヤセル・アブ・シャバブのような協力者によって促進され、イスラエルの軍事化された援助システムを通じて制度化されたガザでの飢餓の武器化は、戦争の戦略だけでなく、人間の尊厳の冒涜です。それは、食糧が支配の道具となり、協力が報われ、食べる必要があるという罪のために民間人が虐殺される考え方を反映しています。人道機関を武装した門番に置き換えたことで、ガザの援助回廊は死の回廊に変わりました。

これは単なる政策の失敗ではありません。それは人類に対する犯罪です。そして最も非難すべき告発は、決して必要ではなかった比較にあります：動物がガザの飢えた人口よりも多くの倫理的配慮を受けているということです。このグロテスクな逆転は、政治的な問題としてではなく、良心の問題として世界的な憤りを要求します。**これを許す世界は、道徳的にだけでなく、文明的に自由落下している世界です。**